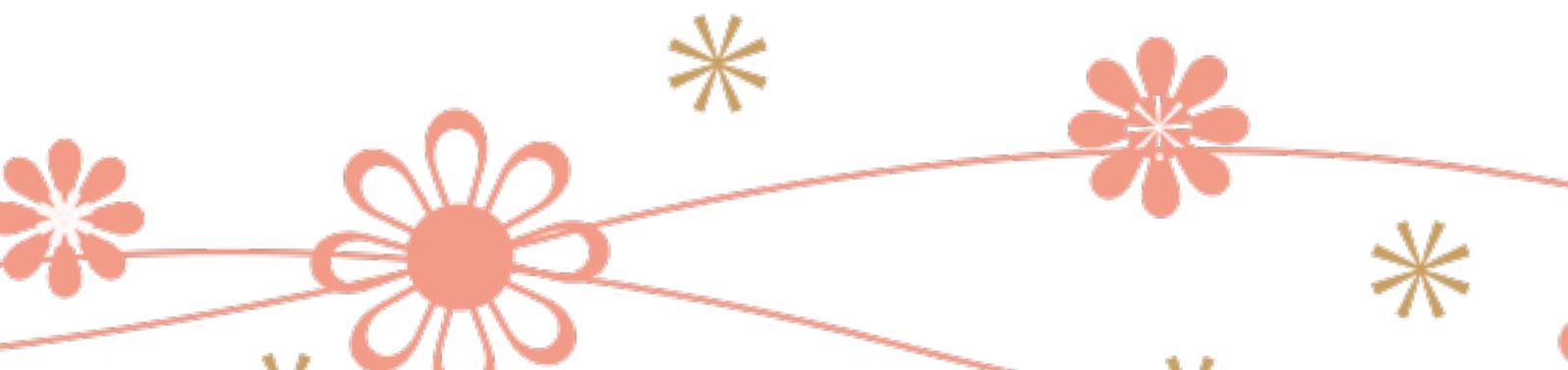


看取りの思い出

社会福祉法人 直鞆会
特別養護老人ホーム やすらぎ園



家族以上の愛情を届けたい

『死を迎えるとき、あなたなら誰に傍にいてほしいですか？ 誰に会いたいですか？

夫、妻、子供…大切な家族。絆が深いからこそ、こじれた時の修復は難しいこともあります。最期のときは深く積もった雪をどうにか溶かしてあげたいという思いと、願ってない手でも暖かく感じてもらえるようにと思いをこめた介護です。』

介護職員

「〇〇さん、天国で楽しく過ごしていますか？」入居した当時は、まだ少し歩かれていてニコリしたお顔が今も心から消えません

あの頃から、4年が経ちました。

言葉は少なかったですが、看取りではいろんな表情で私達に話しかけて下さいましたね。食べ物の好き嫌い、甘いものが大好きだったでしょ。嫌いな物は口を閉ざしてしまうのですぐに分かりましたよ。それから、食欲が無い時にはチョップリ寝たふりをしていたんじゃないですか？ずっと一緒にいるから何でもお見通しでしたよ。ご飯をだんだん食べたくなかったでしょう。喉も動かなくなり苦しかったですか？毎日の〇〇さんの表情を見逃さないように心の声を聴いていました。でも、長生きしてほしいって心の迷いが〇〇さんの顔を覗き込みながら声に出してしまった事、許して下さい。「もう食事無理よね」「誤嚥性肺炎起こしたら大変よ」「食事止めた方がいいかね」などと命の決断を迷っている自分たちの葛藤を見せてしまった事…その時、どう思っていましたか？「まだ、食べたいよ」

「甘いものなら入るよ」「勝手に決めないで」と怒っていましたか？もし、ご家族がそばに居たら私達と同じように迷っていたでしょうね。「そちらで決めて下さい」と言われましたが、そばに居たら「まだ、食べさせて、肺炎になってもいいから」と言ったかな？

食事を断つという事は命の限りを私達が決めるという事、誤嚥性肺炎の高熱で苦しむか、枯れるようにと願うのか…ベッドのそばで、勝手な話ばかりした私達を許して下さいね。

〇〇さんの看取りは、職員の配置移動で新チームになり初めての看取りで、まだお互いの心が通っていない時期に1つになるきっかけが〇〇さんを大切に送る事でした。どうしたらいいのかみんなで考えました。お部屋でゆっくり過ごしてもらおう事、森進一の曲を流すこと、寂しくないようになど、お部屋からリビングが見えると目を開けこちらを見てくれて喜んでくれていましたね。でも、森進一の曲は、私は少し嫌いでした。だって、別れの曲や悲しい歌詞が多くて、いつもなら素敵な曲に聴こえるでしょうが辛く悲しく聴こえてきたから… 〇〇さんにとってどんな思い出だったのでしょうか？時々泣いていたでしょ。その理由を聞かせて欲しかったですよ。娘さんの事も関係があるのかな？以前、娘さんが「母との間に大きな溝ができ、それを埋めることができませんでした。」と話していたと聞きました。親子は同じ時間を過ごしていきますがお互い一人の人間で同じ人生ではありません。私も娘がいて、成長を見守る中で、ふとした時に他人より遠く感じる事があります。子どものために母親は生きているつもりですが、それがたまに子どもは重く感じることもあるのでしょうか？親子だから掛け違えたボタンを戻すことが難しいのでしょうか？

〇〇さんは、早くにご主人と息子さんを亡くされて心の支えが娘さんだったのに、さぞ心残りだったでしょう。そばに居て何とかしたい思いで一杯だったけど結局何もできずにごめんなさい。娘さんの気持ちだけでも聴いてあげたかったけど、そろそろお別れが近づいている時に面会をお願いしてやっと10分来てくれましたが、溝は埋まらないまま最期が来てしまいました。

そんな二人の関係が気になっていたから、最期は私達が家族になろうと決めていました。だんだんと小さくなる〇〇さんに手を添え「安心して」「一人じゃないよ。そばに居るからね」と心の声を毎日送りました。〇〇さんには、届きましたか？「今日の手は温かいね」「今日の手は冷たいね」「今日は汗でチョップリ臭いね」と迷惑な日もあったのでしょうか？

最期の時を感じていたんでしょう。2～3日前から涙を流すことが多くなりましたね。「ありがとう」の涙だったか、「淋しいよ」の涙だったのかわからなかったけど…

私の夜勤を選んでくれたのか急に息が苦しそうになり、スタッフも〇〇さんの事が気になるのかなかなか家路に足が向かなかつたようで帰ろうとしなかった事を思い出します。娘さんとの仲をどうする事も出来なかったから、せめて最期は一人にさせないと私の思いも強くなっていった夜、他のお年寄り一人ひとりに「どうか今夜は、〇〇さんのそばに居させて下さい」と夕食後のお世話をさせて頂きながら願いました。思いが届いたのか、その日はセンサーもナースコールも鳴る事もなく「いいよ、今夜は〇〇さんのそばに居てあげて」と言う声が聴こえてくるような静かな夜でした。

〇〇さんの弱々しい手を握り、必死に息を吸い込む姿を見て、「もう、頑張らずに、ゆっくり眠って下さい」と心の中で会話すると最期は大きく深呼吸をされ深い深い眠りにつかれました。その時、最期の涙がぼろり、淋しかったでしょう。連絡をして、娘さんが来られ「ありがとうございました」と言われ二人で帰って行かれる姿は、「お母さん、これからは一緒に居ようね」と言ってくれているようでした。少し溝は埋められたかな？「〇〇さん、良かったね」「バイバイ」。最期の最期は、娘さんに連れられて帰る〇〇さんを見て、やっぱり家族には敵わないなと思ったけど、スタッフは〇〇さんを大切に送ったこと忘れませんよ。これからも、皆さんが淋しくないように力を合わせ、お年寄りに寄り添ったケアを届けていきます。〇〇さんありがとうございました。

家族が死を受け入れた瞬間

『人にはいつか必ず死が訪れます。多くの場合、大切な人の苦しみを目の前にして、少しでも楽にしてあげたいと思う半面、一分でも一秒でも長く生きてほしいと願います。大切な人の死を受け入れるということ、その気持ちを整理していくご家族と最後まで一緒に歩みます』

看護師

皆さんにとっての母親の存在ってどのようなものですか？

一言で想像すると「温かい、ふんわり、包んでくれる、強い、甘い」などではないでしょうか？

赤ちゃんの時には抱っこされ、お母さんの匂いにいつも包まれ、小学生の参観日にはそわそわしてお母さんが来るのを待ち、中学生・高校生では進路の相談やお父さんには言えない恋の話をしたりします。しかし、反抗期の時には母親の言葉にいちいち頭にきてひどい事を言ってしまいますが、どんな時でも自分の味方でいてくれるのが母親だと思います。特に、娘にとっての母親は、将来の自分の生き方や家族の支え方を教えてくれる、とても尊敬できる人です。

また、顔を見るだけでも安心し、どんなに苦しい時にも辛い時にもそばに居て人生の道しるべとなって、見守ってくれたお母さん、そんなお母さんが、居なくなることを考えなければならない時、どうしていいのか分からないほど不安で、また、愛しくてたまらないものではないでしょうか？

母親が病院で治療を行っても症状が改善しないために医師から老衰と診断された娘さんのお話をします。

この娘さんにとって、母の存在はとても大きく、母の死に対して、自分の中で幾度となく葛藤しながら受け入れて行く姿が私の心に残りました。

はじめて医師に老衰と診断された時、娘さんへ電話で、食事を摂っていても栄養が十分に吸収されていない事、身体中に水が溜まってしまうため、肺や心臓も水が溜まり、心不全を起こしている事などを伝え、次回の受診日に病院へ一緒に行って頂くようお願いしました。娘さんは、大丈夫なのかと、とても心配そうでしたが医師から詳しい説明を聞くことをすすめました。

病院へ受診し医師から老衰と伝えられると、「こんなに元気なのに、まだ、食事もできるし、話もできるんですよ」「何か治療は無いのですか？」と何度も聞いていました。医師は、「甲状腺の薬と利尿剤で調整し、身体のむくみをとる治療をしてみましょう」と話しましたが、これで母親が少しでも楽になってくれるのか、心配な様子で何度も医師に質問を行っていました。

その後、園では毎日、医師の指示を確認しながら治療を続けてはみましたが、一向に治る兆しが見えず、食事は少し食べてくれていましたが、身体はむくみ、「あー あー」と、きつさを訴えることが多くなっていました。

病状は決して良くないのですが、まだ、少し会話もでき、食事もとっている母の姿から、とても死を想像する事ができなかったのでしょうか。涙を流しながら話す姿が何度も何度も見られました。

娘さんへは何度か通院の付き添いと日常の報告を繰り返し行い、検査データや医師の添書の内容を見て頂き、何とか老衰と言う事を理解してもらいましたが、話の中ではいつも涙して「もうダメなのはわかっています。でも、まだ話が出来るんですよ」「一日でも長く生きていて欲しい」「顔が見れるだけでもいいんです」「今日は調子が良かったんですよ」「治療の方法はもうないのですか？」何度も何度も、母親はまだ生きている、自分の支えになっている様子を含め、話をされていました。娘さんの希望に添いながら、少しでも死を受け入れられる様にと、娘さんの話をゆっくり聴く時間をとり、電話で30分も話したこともありました。また、診察の時、治療を希望する娘さんと、治療が無いので囑託医にお願いしたいという医師との話に1時間おつきあいの話なのですが、娘さんは一歩も引くことはありませんでした。老衰を理解しなければならないと言う反面、母親が弱っていく姿を見ると、意識があるうちは何か手立てがないかという気持ちから、医師にすがりついたのでと思います。心の中ではいつも母の死について苦しんでいたんでしょうね。そんな様子は、そばに居て痛いほど伝わってきていました。

私たちは、はじめ、何で理解してくれないのかと思っていましたが、娘さんの母を思う気持ちが強く、「あ～、最期まで娘さんに付き合おう」「受け止められるまで寄り添おう」「私達も、娘さんの気持ちになってみよう」と母親の死はどんなものかと置き換えながら、涙が枯れるまで話を聴く覚悟をしました。それは、娘さんがあまりにも一生懸命だったからです。

そんな時、医師が「本当は治療にしか使ってはいけないのですが、一度だけアルブミンを入れ浮腫を取ってみましょう。しかし、これは何度もできない治療です」と言われ入院しました。医師も娘さんに根負けしたのです。一週間たって浮腫は引き、少し元気になって帰ってこられました。数日間で前よりもっと症状が悪化していきました。その後の受診は、医師から三行半がでて、「もう治療はありません。囑託医に任せます。受診はしないでください」と一喝、娘さんに言い放ったのでした。その時にはなんてひどい事をと私達も思いましたが、母親の生にしがみついている娘さんに決心が付く言葉だったように思います。それからは、死について少し納得されたのか、葬儀の話や母親の思い出を語れるようになりました。それから、数日後、母親の死を迎えることとなりました。

娘さんが母を思う気持ちと死を受け入れられるまでの時間は、娘さんにとって十分だったのでしょうか？初盆の時には「やすらぎ園に来るのは辛く、母の事を思い出し涙が出るのですよ」と言っていたのですが、「あの時は、本当にありがとうございました」とユニットの職員や看護師を探し、みんなにお礼を言っている姿を見ました。

看取りを通して感じるみんなへの感謝の気持ち ～ありがとう～

『人の心はどんなときに温かくなったり、お互いを必要とするようになっていたり、もっと強い力へと変化するのでしょうか。職種を越え相手のことを思いやる心、それは仲間同士でも大きく感じますが、仕事の枠を越えた優しい手が差し伸べられた時、さらに強い絆が生まれていることを感じます。最期の瞬間に注がれる愛情と思いやりを深く感謝します』

介護職員

私は、〇〇さんの看取りを通して、皆さんがくれた温かさを感じ、たくさんのありがとうを伝えたいと思います。

〇〇さんは、やすらぎ園に来るまでは、拘束をされ動くことを許されない生活だったとご家族から聞きました。認知症がひどく、時には車椅子から落ちてしまう事もありましたが、車椅子で隣のユニットに行ったり、地域交流室を自由に散歩し看護師からユニットに連れてきてもらったりしながら、少しずつ笑顔や言葉にならない声で職員と会話するようになりました。その様子は、ご家族からも喜んでもらえユニットの職員も大変な方だったけど親しみを感じていました。

しかし、認知症はどんどん進行していき幾度となく食事が食べられなくなり、肺炎、尿路感染で入退院を繰り返すようになってきました。

その様子を良く知り、いつも気にかけていた職員の移動があって、間もなくの事でした。いよいよ食事が入らなくなり、口に入れた物が横からだらだらと流れるようになったのです。もともと痩せた体はどんどん骨と皮になっていきました。

とうとう看取りの時がやってきたのです。

看取りになって、その方にできる事をいつも考えます。何をすれば穏やかに苦しまず、その時を迎える事ができるのか、「楽な体位はとうですか」「褥瘡は絶対に作りません」「口や喉は乾きませんか」「痛いところは無いですか」「気になる事は無いですか」「身体はきれいでき持ちよく過ごせていますか」「息は辛くないですか」聞きたい事、自分たちのできる事をたくさん考えます。でも、思いつかない事、自分だけではできないことがたくさんあります。大好きな〇〇さん、みんなで協力してしっかり最期を送るから… その中で気づいたみんなに贈るありがとうをここで伝えます。

1つ、みずほ歯科の方々へ、やすらぎ園に縁を持ちお口の管理をしてくれる毎日で100人のお年寄りの口腔ケア週に1回とはいえ大変な時間をぬって、〇〇さんの口腔ケアに毎日来て頂きありがとうございます。ご自分の歯がたくさんあり自分達では思うように清潔に保つことが難しく、大変感謝しています。自分がもし家族だったら口の中は汚く、唇は乾きパサパサになり切れて出血したり、舌が汚れて口臭がしていたらきっと悲しい思いをしたと思います。熱もなく、肺炎を起こさず、最期を迎えられたのも、みずほ歯科の方々のおかげだと改めて感じています。

2つ、看護師さんへ、ケアで悩んでいる私達にいつもアドバイスをくれてありがとう。手の匂いが気になる事を話したら、「手浴が一番いいよ」と教えてくれて、すぐにケアに取り入れると臭いもなくなり手が清潔なって亡くなる日まで、ずっと続けることで〇〇さんとの良い時間をとる事ができました。〇〇さん「どうでしたか」気持ち良かったと思っていただけたら嬉しいです。

看取りが始まった頃は何に気を付けないといけないか分からず、少し呼吸状態が悪くなったらオロオロするばかりで、看護師に頼る事が多かったです。〇〇さんの看取りだけではなく、いろいろな看取りを経験し積極的に関わる事ができるようになったのも看護師が傍にいてくれてアドバイスをしてくれるおかげだと思っています。

3つ、最期の夜、ずっと付き添ってくれた職員にたくさんありがとう。家族の体調が悪く付き添えず最期の夜、〇〇さんへ「私がそばにいますから安心していいですよ」と声掛けをする反面、看取りの最期は何度経験しても不安になります。そんな私に、勤務時間はとっくに過ぎているのに「もう少し一緒にいよう」と亡くなるまで、〇〇さんの手を握ってくれてありがとう。

以前、同じユニットで〇〇さんを気にかけていた職員が夜勤で、何度か様子を見に来てくれていた時、顔を見るたびホッとしたことを今でも思い出します。本当にありがとう。

亡くなられたあともすぐ来てくれて、ご家族や上司に電話連絡している間に、何も言わず二人で便が出たオムツを交換してくれて、ありがとう。

一人では不安で、「これでいいのか」とか「ゆっくり手を握ってあげられずにごめんね」と〇〇さんへの心残りがあったかもしれません。いてくれるだけでも感謝だったけど、いろいろな心配りに大きな感謝をしています。支えてくれてありがとう。

看取りに関わるたくさんの人たちにいっぱいありがとうを伝えたいです。私もみんなの支えになるように今回のお返しを必ずします。

看取りで生まれる絆は、やすらぎ園の中でも強くなり、今では、みずほ歯科という仲間が増え大きくなっています。

〇〇さん私達の看取りはどうだったですか。

痛みを共に闘って

『癌末期における全身の痛みや、身の置き所がないほどのきつさやだるさは、私たちの想像をはるかに超えるものです。その痛みに苦しむ人にただただ寄り添い、死への不安や恐怖のその言葉に真摯に耳を傾け、少しでも穏やかな死を迎えられるようにと願います』

介護職員

やすらぎ園が多床の時から顔見知りの〇〇さん。認知症がひどく何度も同じことを言ったり、物忘れも言った先から忘れるくらいでしたが、周りの利用者様の世話をしたり、掃除を手伝ってくれたり、時にははっきりものを言い周囲と口論になったりするくらい、お元気おばあ様で、私達はそんな〇〇さんとのおしゃべりが好きでした。また、家族関係は息子さんひとり、女手ひとつで自分を育てる為に、働きずくめの生活だったと聞きました。長い間の苦勞でなのか、肺の病気になってしまい以前から在宅酸素を手放せない状態でした。この話から想像してみても〇〇さんは、本当に働き者で、ちょっと勝気で、お世話好き、家にいる時も掃除、洗濯と働きずくめの人生だったのかと思います。

私がユニット移動になり、久しぶりに〇〇さんに会ってびっくりしました。

認知症、酸素が必要な状態だったにもかかわらずあんなにお元気だった方が、体調を壊し少し呼吸も荒く痩せていたのです。そんな時に検査結果で貧血が見つかりました。原因は、胃癌で、余命宣告されました。

癌の看取りは初めてだった私達ですが、息子さんもお母さんの認知症がやすらぎ園で落ち着き、安心できる環境から病院への入院は望まず、ここで最期を迎えたいと強くお願いされ看取りを決心しました。それから、〇〇さん、息子さん、スタッフの三人四脚が始まりました。

どんどん癌に侵され、食欲は無くなり、栄養のバランスが崩れ身体に水が溜まっていき、もちろん肺にも少しずつ水が溜まっていったのでしょうか。両足はマシュマロマンの様に皮膚の下が透けて見えるようなほど浮腫が出て、行き場のない水分は毛穴のような小さな傷からあふれ出し、水で押さえつけられた毛細血管が皮膚の下でやぶれ血の風船のように膨れ上がり、肺の水は、もともと苦しかった呼吸を更に苦しめていました。〇〇さんも、癌の悪液質が身体を回りどんなふうにかきついかを言葉で言い表せず、ベッドで少しでも横になっていたただこうと声をかけるのですが、認知症もあり、すぐに起きて来られ安静がなかなか保てず歩きにくくなった足を引きずり、居室から出て来られることの繰り返しでした。両下肢に巻いた水分をとるためのシート交換も一日に何回も行いますが、ご本人は申し訳なさそうにされ、人の手を借りたくない、出来るだけ自分でという思いが私達にも伝わってくるようでした。

食事も殆ど入らなくなった頃、ご本人の食べたいものを提供しようと息子さんとも話、食べたい物を聞き、寿司・漬物・塩辛などを準備し、一口でも食べてもらえるようにすすめると「おいしいね～」ほんの少し食べてもらえた時の〇〇さんの顔と苦しみの中でホッとしてくれる時間が作れたときの私達の喜びは言いようもなく今でも心に残っています。息子さんも好物のおやつを持参され、居室でお話しされながら親子の時間をすごされていました。

しかし、毎日の癌との闘いは、認知症の〇〇さんでさえ、ご自分の命がどんなふう途切れようとしているのか感じとってしまうくらいきつかったのでしょうか。苦しくて、痛くて、不安でどうしたらいいのか、「そばにおってね、先生、ごめんね、ごめんね、私は死ぬと？どうなるんかね？」と傍を離れがたい表情には〇〇さんの死に対する恐怖感や辛さが伝わってきました。苦しさもピークになり、ベッドで寝たり起きたりを繰り返す。「きつい～苦しい～代わって～代わって～」と横になり休むことすら困難な時には、息子さんも私達も本当にどう返事をしたらいいのか分からなくなるほどでした。少し休まれたかと思うと「ぐぁ～ぐぁ～」と酸素マスクを付ける事すら苦しく、体力的に立って歩く力がぎりぎりの状態にもかかわらず、すぐにリビングに来られ「先生、先生～」と呼ばれ、わずかでも安心して横になってもらえるように、ベッドをリビングに出し横に座って体をさすったりしていました。

たまに気分が良い時は車椅子で外に散歩に行くと「嗚呼～気持ちがいいね～」と苦痛な表情も和らいでくれる時が、私達もほっとするひと時でした。

私達は介護のプロです。看取りは今までにたくさん経験してきました。しかし、こんなに苦しむ〇〇さんに今できる事、したい事をどう援助し生きている時間を大切に過ごして頂くかを考える事はとても難しく、時には病院の方が良かったのかと不安でいっぱいになりました。体をさすりながら傍に居る事、苦しみで身のやりどころがない時は抱き合っ一緒に泣くこと、心配で何度も居室に行き乾いた口にお茶をそそいであげること、できるだけ明るく会話すること、「あなたの苦しみを少しでも和らげたい、どうしたらいいですか？」と心の中で問い続ける事しかできませんでした。そして決めた事は、息子さんと共に残った時間にとことん付き合う覚悟を持つという事でした。

そんな中、とうとうその時がやってきました。息子さんも泊まってくれるようになり、麻薬を使い痛みや苦しみを取る方向でしたが、薬が切れ少し意識がはっきりした時、付き添っておられた息子さんの声を聴いてうなずき、手を握り良い時間が持てました。最期はお茶を一口飲まれ穏やかに逝かれました。息子さんは「母らしい最期を迎えさせてもらいました」といつてくれた時にはホッとして、私達も一緒に戦えて、やっと苦しみから解放された表情を見て「楽になれて良かったね」と〇〇さんに心で語り掛けました。

許してね

『迷いは迷いを呼ぶ。大切な方の死をサポートする専門職としてのあるべき姿はどうなのか。自分たちの不安を乗り越え、家族に安心を届けられる看取りでありたい。最期の時を迎えるにあたり、専門職としてどんな姿勢で看取りに挑まなければならないかを改めて考えさせられます』

介護職員

雨が降っていると「私の傘があるからそれを貸してあげる」、ベッドで寝ていると「夕ご飯の時起こしてね」、「私のあとに寝ていいよ」など、小さな声でスタッフと会話する記録がカルテにたくさん残っています。小さくて、愛くるしく大好きな方でした。

H24年3月に入居され、ゆっくりとしたペースで食事を摂られていましたが、徐々に自力でスプーンが口に運べなくなり介助したりしていましたが、時間がかかると眠り込んでしまうため、食事時間をずらして食べて頂いたり、〇〇さんの状態に合わせた生活が始まりました。娘さんも良く面会に来られては散歩をされて、家族皆さんが仲が良い印象があり、お母様を大切にしていらっしゃることもよく分かりました。

娘さんは、「いつも良くしていただいてありがとうございます」ところられるたびに言って頂いて、私達も、〇〇さんのお世話を認めてくれているようで、すごく嬉しく思っていました。

少しずつしか食べることができず、娘さんが食事介助をしている時も、「お母さん、もういらないの？食べないの？」と優しく尋ねるとコクリとうなずき娘さんも仕方なく食事介助の手を止めるようになってきました。

入園から翌年の10月3日いよいよ食事が入らなくなり看取りが始まりました。原因は脳の萎縮で老衰です。寝ている時間が多くなり、嚥下も不良になりました。意欲ができるようにと点滴や薬を開始してみましたが改善する事はありませんでした。

そんな中、亡くなる1週間前に嘔吐をしてしまい、そのために肺炎を起こしてしまったのです。高熱が続き坐薬を入れてもさがりません。きつそうにしている頃、以前から飲んでいたけいれん止めの薬を切ったからなのか、電解質のバランスが悪くなったのか、脳からなのか、熱のせいなのか、唇がピクピクしてきました。大切な〇〇さん、大好きな〇〇さん私達は、そんな〇〇さんが苦しんでいるのを見てはいられず、娘さんにもどんな声掛けをすればよいのかわからず、おろおろするばかりでつい職員同士である会話や看護師とのやり取りが〇〇さんやご家族の耳に入ってしまういどんなに不安で心細い思いをさせてしまったのか今でも後悔しています。

老衰は治る事はありません。誤嚥しての肺炎、嚥下機能も回復するような見込みはありません。入院すれば帰ってきて、また看取りのやり直し、苦しい思いを何度もさせてしまいます。でもこのまま高熱の中、私達がやってあげられることがわかりません。唇が震えるたびけいれんではないかと心配で、八方ふさがりで本当に辛かったです。もっとしっかりしてどっしり構えて、みんなでケアの方向性や情報の整理をして、ご家族と本音で話していれば不安にさせずに済んだかな？人が亡くなる事の心構えができていなかったこと。

大切な娘さんたちに心配や不安にさせてしまって本当にごめんなさい、許してね。〇〇さん。

<エピローグ>

やすらぎ園では平成18年から看取りに取り組み、これまでに多くの利用者様の最期に寄り添うことができました。看取るといことは本当に辛く大変なことです。あとで振り返るとその過程こそが、やすらぎ園で共に過ごした利用者様からの、私たちへの贈り物なのではないかと感じています。

これまで介護させていただいた利用者様おひとりおひとりに感謝を込めて。